

# 森本あんり著『反知性主義——アメリカが生んだ「熱病」の正体』

(新潮選書、二〇一五年、本文一一二七六頁、註二七七—二八二頁)

宮 平 望

本書(以下、森本あんり著「反知性主義」を指す)は組織神学から歴史神学にわたる領域を射程に入れる専門家によるアメリカの反知性主義の研究書であり、リチャード・ホーフスタッター著(田村哲夫訳)『アメリカの反知性主義』(みすず書房・二〇〇三年/原書・一九六三年)を祖述するにとどまらず、博搜された各事例をアメリカ・キリスト教史と綿い合わせて検討している。著者(以下、森本あんり氏を指す)によると、本書は「多事多端」(二七六頁)の中で上梓されたものであり、「註については、厳密な学術書ほど丹念にはつかなかつた」(二七五頁)ものの、著者が既に著した関連書からも窺い知れる。本誌の書評形態の鑑みに倣って、まず本書を概説的に展望してから論評を加えよう。

著者は「はじめに」、近年日本において「反知性主義」という言葉が、実証性や客観性や公共性の欠落した胡乱な大衆迎合的気質を指す表現として人口に膾炙したもの、本来は半世紀も前に「ホフスタッター」(本書本文中ではこう表記

されている)の前掲書に遡及される専門用語であり、アメリカの知的伝統の功罪を分析したものととして、アメリカ・キリスト教史の予備的知識なしには咀嚼困難な名著である点を指摘する。かく言う反知性主義は、「知性そのものでなくそれに付随する『何か』への反対で、社会の不健全さよりもむしろ健全さを示す指標だった」(四頁)であり、各種研究機関では最先端科学技術が駆使される一方、教会では進化論を否定する創造論や死者の復活が開陳されるようなアメリカ社会を繙く際の要として解明的な役割を果たすと同時に、二一世紀の日本にとつても汎用性に富む主題である。

まず「プロローグ」では、二〇〇四年のレーガン大統領の国葬式典において、本人の遺言に基づいてピュリタン指導者ジョン・ウインスロップの一六三〇年の説教が朗読された点に言及し、人間の服従と背反のそれぞれに対して神が与える祝福と滅びを明示した申命記三〇章を引用するこの説教が、神の一方向的で無条件の恩寵を説く本来のヨーロッパ大陸

改革派契約神学に反して、従順な人間に対して神は恩恵をもたらすはずだという御利益的で互恵的な契約理解を導き出した点をキリスト教のアメリカ化の象徴的典拠として挙げる。すると、例えばアメリカの繁栄は、神への忠実さを結果的に例証しているという独善的な視点が生まれる(マックス・ヴェーバーの「幸福の神義論」)。ここで、このような宗教の土着化、文脈化は、ウイルスに比定される。ウイルスが宿る主体はウイルスに大きな影響を受けるが、ウイルス自体も環境適応のために自己変容をする点で、まさしく先住民を抑圧しながらアメリカに宿ったキリスト教は片務契約理解を双務契約理解に病変させるほどのものだったのである。

歴史的にこのウイルスは、アメリカ独立前から「周期的な熱病のようなもの」である「信仰復興(リバイバル)」(五六頁)を顕在化させたが、この前提としてピュリタニズム知性主義があることを解説したのが、「第一章」である。ピュリタンが入植したニューイングランドは比較的高学歴者が多かったが、それは典礼執行を中心とするカトリック教会の聖職者とは異なり、聖書原語に基づく解釈から紡ぎ出された説教を重視するプロテスタント教会の牧師には、特定教派神学よりも普遍的価値を有する古典語学やそれに基づく釈義学という高度な学識が必要とされたためである。また、リベラルアーツと呼ばれる教養諸学科が重視されたのも、救い以外の一般的な事柄も含む聖書を聖職者だけでなくすべての信徒

が同様に直接自力で読解できるようにするためである(「聖書原理」と「万人祭司」四三頁)。

そして、このような教育を受けた牧師は教会員全員の平等な投票によつて教会に招聘されたが、朝の九時から最低三時間には続く礼拝は、祈祷と聖書朗読と「ブレイン・スタイル」(五〇頁)、つまり、平明な語り口調による説教からなり、聖書原語や教父文献の多用は回避され、大人も子どもも同席する場で神学的主題が容赦なく語られた。

今やアメリカでは、メガチャーチでの熱狂的礼拝や大統領選挙という巨大政治ショーが隆盛を極めているが、「第二章」はそれらの背景にある「信仰復興」に焦点が当てられる。これは一八世紀にはアメリカ独立革命を、一九世紀には奴隷制廃止運動や女性の権利拡張運動を、二〇世紀には公民権運動や消費者運動に裨差したが、それは信仰復興運動が平等というアメリカの理念を社会の中で具現化するためである。この大覚醒を記録した一八世紀のジョン・エドワーズによると、北東部のマサチューセッツから中部植民地のニュージャージーなどに至るまで教会は大盛況で、エドワーズ自身の教会は老若男女、黒人もこの出来事に関与していたという。

著者によると、こうした「集団ヒステリー」(五八頁)は、信仰の希薄化の進んだ第二、三世代の増加とそれらの世代に期待される回心体験の必要性と、他方でニューイングランドの人口急増とそれに伴って信仰復興を伝えるマスメディアの



発達を背景とするが、この後者の具体例としては、イギリスから訪米中のジョージ・ホイットフィールドの「説教しては印刷する」(七四頁)という伝道があり、これは現代のテレビ伝道者の雛型と言える。こうした手法は「自作自演」劇だと評されることもあったが(七五頁)、伝道者らの伝えるイエスコ、法律学者たちの偽善性を酷評した点で反知性主義の原点である(八五頁)。

「第三章」は、このような反知性主義を育む要因の一つとしての平等の理念を取り上げる。平等概念は宗教改革の万人祭司論を原点とし、アメリカ独立宣言にもすべての人の平等が唱道されるが、現実社会では不平等が存在する。こうした状況と折り合いを付けつつ改革を進めたカルヴァン派やルター派といった主流派チャーチ型とは別に、幼児洗礼を否定して教会の存立を根本から否定する再洗礼派や、既存の教会制度や教職制度を否定する徹底的平等主義に立つクエーカーといったセクト型は、アメリカにおいて主流派教会から迫害を受けつつも、公定教会の廃止という政教分離において個人の自由と権利を擁護する合理的な世俗政治家たちと一致し、アメリカで活路を開いたのである。ここに、セクト型と反知性主義との間の親和性が見られる。

この反知性主義は自然観にも深い関係があることを指摘したのが、「第四章」である。ジョナサン・エドワーズが自然の美に観入して神の栄光を見て取り、十九世紀のラルフ・ウエー、ある意味で言えば神と人の対等性を示唆していると言えるだろう。また、こうした平等意識は、女性や黒人の社会進出を後押しした彼の実践志向にも表れているという。

「第六章」は、アメリカが工業化、都市化すると共に大量の難民を受容する一九世紀末に到来した第三次信仰復興運動を検討する。ここで特に興味深いのは、この時代に活躍した大衆伝道者ドワイト・ムーディーが移り気な人々の気質を見抜いていたことに言及された後に、リバイバルとビジネスの「相性」(一九〇頁)に着目されている点である。リバイバルによって人は一度で聖人になるわけではないので、繰り返しリバイバル集会を必要とするが、これは一つの商品で満足できずに繰り返し同じ商品を必要とする客を相手にするビジネスと類比的関係にあるというのである。実際、ムーディー主催のリバイバル集会として商業施設が転用されたり、集会専用施設が設立されたりと、大規模商業資本と大規模リバイバルリズムは、双生児のように仲がよい(二〇三頁)。ムーディー自身は身の丈に合った生涯を貫いたもの(二〇五頁)、こうした分析は「巡回伝道」の世俗版が「巡回セールス」であるという示唆と相俟って(二〇八頁)、現代アメリカのメガチャーチの牧師が、成功した経営者と思なされる傾向を想起させてくれる。

以上に取り上げられた反知性主義の体現者らの完成態として、匹如身から大リーグ野球選手を経て大衆伝道者になった

オルドー・エマソンが自然こそ神性の顕現であるとして、ヨーロッパ的知性や書物への過剰依存に対して警鐘を鳴らす時、ここにも反知性主義が見られる。

その後の十九世紀アメリカの国土拡張を背景とする第二次信仰復興運動は、「第五章」で探究される。この時期に特に成長したのは、監督制の下で巡回牧師制の効率性を活用したメソジスト教会と、牧師任命権が各教会にある各個教会主義のパプティスト教会である。こうした教派は、「素朴な聖書主義、楽観的な共同体思考、保守的な道徳観」(一五三頁)を共有して、今日の福音主義の素地を形成した。そして、これらの教派で活躍した伝道者たちが必ずしも高学歴のインテリではなかったことと並行して、一八二八年のアメリカ大統領選挙において、第二代大統領を父に持つインテリのアダムズではなく、軍人としての名声はあつたものの素朴で実直なジャクソンが大勝したこともこの時期の反知性主義の象徴的出来事である。この大衆的ジャクソンデモクラシーを背景にして登場したのが、第二次信仰復興運動の中心人物チャールズ・フイニーであり、彼は聖書や神学を独学で学び、聖書原語に基づく釈義をしなかつたにもかかわらず、多くの聴衆を回心に導いた点で反知性主義の代表的存在であった。リバイバルについて彼が、神による奇跡ではなく、神と人の協力作業であり、人間に労働と休息という生活リズムがあるのと同様に、時期を見定める必要があると考えていた点も(一八一

二十世紀初頭のヒリー・サンデーが最終章、「第七章」で精査される。こうした人物の登場は、南北戦争前に訪米したフランス人トクヴィルがアメリカでは知性における平等の理念が根づいていることを観察したように、誰でも自らの出自に関係なく自己を向上させることができるという信念が社会に活着していることに基づいており、巨額の富を築いたサンデー自身は、リバイバルの手法を「ビッグビジネス」(二四三頁)から学んだと公言している。この点と関連して、教会が経済的には税金によって維持される国教会制度のヨーロッパとは異なり、憲法が政教分離を定めているアメリカでは教会が言わばヨーロッパビジネスとして自由競争によってサバイブしなければならぬ事情や、好戦的な行進曲が賛美歌として活用された点にも触れられている。更に、教会や伝道者のこのような「自助」が神による「天助」と相即しているという点

が、アメリカのキリスト教の特徴なのである(二五六頁)。最後の「エピソード」では、本書の議論が整理される。本来、「知性 (intellect)」は、単なる「知能 (intelligence)」とは異なり、自分に適用する「ふりかえり」機能があり、特に権力との癒着に対する反感が本書で反知性主義と呼ばれるものである(二五九―二六二頁)。この反知性主義は、ヨーロッパの王制や貴族社会、宗教改革といった権威や伝統の欠如したアメリカで代替的に活躍した知識人による知性主義と共に生まれた抑制機能であり、民主的平等を希求するこの気質は



いかなる体制に対しても異議を申し立てる権利があるという宗教的確信に根差している。

このように本書は、アメリカの歴史的出来事の誘因に信仰復興や平等の理念が伏在し、それらの反知性主義が知性主義と拮抗してきた歴史や、教会のその（リバイバル）が実は教会の（サバイバル）のためにも必要であっただけでなく、プラグマティズムやビジネスと通有する形態を纏っていたこと、さらには教会が現代の娯楽に相当する役割を担っていた点も際やかに論証し、その過程で当時、当地の興味深い逸話やアメリカ社会を具体的に活写した映画の紹介を随所に鏤めた達意の師表的研究書であり、読者に（マネージ）しきれないほど広汎な（イメージ）を提供してくれる。例えば、本書の反権力的反知性主義は、かつて学校教育から見捨てられた発明王エジソン（一八四七年—一九三二年）が、「蓄電池の実験に一万回失敗して友人に慰められた時、うまく行かないやり方を一万通り発明しただけだよと言った」ことや（Thomas Edison, *The World Book Encyclopedia E Volume 6*, [Chicago, IL: Field Enterprises Educational Corporation, 1966], p. 50）、プリンストンの幽霊と呼ばれたジョン・ナッシュ（一九二八年—二〇一五年）が、「独創性に固執し、既成の権威を蔑視し、自立心を保とうと心を碎いた」こと（シルヴィア・ナサー著「塩川優訳」『ビュートイフル・マインド 天才数学者の絶望と奇跡』「新潮社・二〇〇二年」十頁）に想到さ

その建物に隠然と残されている精妙な設計図とそれに基づく建築手法には誰も手を出すことはできない。しかし、通りすがりの人でもその中の喫茶店で一時を過ごすなら、その建物

せ、戦前、鶴見俊輔（一九二二年—二〇一五年）が大学生の頃、ニューヨークで会ったヘレン・ケラー（一八八〇年—一九六八年）から、大学で「学友（learn）」ことを「学びほぐす（unlearn）」必要があると教えられ、その際、型通りに編んだセーターを元どおりにほぐして、自分の体に合わせて編み直すことだと理解した経緯とも通底する（朝日新聞二〇〇六年二月二十七日 朝刊 オピニオン「一五頁」。「学びほぐす」という「ふりかえり」機能には、権威や権力と癒着した「既存の通説の欺瞞性を教える（unlearn）」教育者の存在が重要である。それは一般に、一過性の専門的知識よりも永続的なリベラルアーツの知恵を授け、森有正の言葉で言うところの「浅薄な「体験」よりも変革的「経験」を内面化させる。

ハーバード大学、イエール大学、プリンストン大学という歴史の変遷は（四六頁）、さらにプリンストン神学校から独立したウェストミンスター神学校の保守的改革派神学思想とその後の分裂や、そもそも一九世紀初頭ハーバード大学のユニテリアン勢力に対峙して開設されたアンドーバー神学校で、この世でキリスト者となれば天国へ、そうでなければ地獄へ行くという単純な二分法とは別に、この世でキリスト教に接する機会のなかった人の救いを巡って一九世紀後半に繰り広げられた論争（「アンドーバー論争」）なども考慮するなら一層、知性の役割を実感させてくれるだろう。通行人が瀟洒な建物を汚したり、傷つけることは容易だが、

の真価を味到できるかもしれない。書評は統一的要素を内包する。読者は本書と共に著者の他の著作やそれらの引用文献も味読する必要があるだろう。